

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：32713

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25460638

研究課題名(和文)慢性疾患に有用なホープレスネス尺度の開発と応用

研究課題名(英文)Development and application of hope scale useful for chronic disease management

研究代表者

柴垣 有吾 (Shibagaki, Yugo)

聖マリアンナ医科大学・医学部・教授

研究者番号：70361491

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：慢性腎臓病は疾患管理の原動力としての希望が当てはまり易いモデルであることがあり、切実な希望として「自己実現欲求」よりも、現実的な「現状の維持」に意味を見出していることが明らかとなった。ホープが生じる前提として、慢性疾患を受容するプロセスなどの内的基盤や、Social supportなどの外的基盤が必要であると考えられた。さらに、慢性腎臓病患者を対象として、尺度(質問紙票)を作成し、信頼性と基準関連妥当性が実証された。

研究成果の概要(英文)：Chronic kidney disease was shown to be a good disease model for fitting hope as a motivation for disease management of patients. We also found out that their relevant hope was more realistic (maintainance of the present status) rather than achieving self-realization. Internal foundation such as process accepting chronic disease and external foundation such as social support are thought to be necessary for achieving hope. In addition, we established the new hope scale and proved its reliability and validity.

研究分野：腎臓内科学

キーワード：医療社会学 尺度開発 慢性疾患 希望

1. 研究開始当初の背景

ホープレスネス(絶望感)は心理学分野だけでなく医学分野でも注目されている心理的因子である。特に精神医学と腫瘍学では以前からホープレスネスに関する研究が行なわれていた。例えば、うつ病患者ではホープレスネスがうつに特有の認知的な異常の1つと捉えられており、ホープレスネスが自殺の実行を予測する因子であることが示されている。がん患者においてはホープレスネスが短い寿命と関連する可能性が指摘されている。このホープレスネスは心理療法によって改善しうる(Weis R et al, 2011)。したがって、ホープレスネスの改善は自殺の実行や寿命といった臨床アウトカムを改善させる可能性があるため、重要なターゲットとなる。

医療の進歩や高齢化に伴い、日本では慢性疾患を有する患者が増加している。慢性疾患の患者の生活の質(QOL)をいかに向上させ、健康寿命を延伸させるかが課題となっている。心理的因子であるホープレスネスも、慢性疾患における治療の遵守や臨床アウトカム(原病の悪化、合併症の発生、寿命など)に寄与する可能性が示唆されるが、エビデンスの不足により不明である。

日本語でホープレスネスを測定するための尺度としては、Beckのホープレスネス尺度(Beck AT et al. 1974)や拡張版ホープレスネス尺度(Abramson LY et al. 1985)がある。しかし、慢性疾患患者に適切に回答できるホープレスネス尺度の開発自体も研究課題と考えられる。

2. 研究の目的

慢性疾患患者がより簡便に、かつ適切に回答できるホープレスネス尺度の開発をするためには、項目反応理論を用いた Computer Adaptive Test (CAT)の手法が適用可能である。CATは患者のホープレスネスの程度に応じて、適切に測定できる質問項目を提示し、回答を求める。CATを導入することで、Beckのホープレスネス尺度で30項目あったものが、患者によっては10項目程度で測定できる。また、CATを用いることができれば、従来の紙筆を用いた測定に比べて回答が容易になり、対象者の負担感も軽減されると考えられる。以上の背景から、本研究では、慢性疾患に有用な日本語版ホープレスネス尺度の開発を行ない、臨床疫学的手法を用いてホープレスネス尺度の臨床現場での応用化を図ることを目標とした。

3. 研究の方法

研究1 文献研究

これまで国内外で開発されたホープレス

ネスに関係する尺度開発論文を収集し内容を精査した。準備を進める中でホープレスネスをポジティブな方向から捉えるホープを考える事の重要性・発展性を見出し、ホープ尺度についても文献研究を行った。

研究2 構成概念の検討・項目プールの作成

心理学専門家・QOL尺度専門家・内科専門医らで、構成概念を検討した。すなわち、慢性疾患における希望は、どのような概念で構成されるかを検討した。次に、構成概念に沿って、質問のプールを作成した。

研究3 質的研究(インタビュー調査)

事前に質問内容を策定した。質的研究の段階では、ホープレスネスではなくホープ関連する概念を聞き取るためのインタビューを行った。

半構造化インタビュー : 3名の慢性的な運動器疾患の通院患者を対象にした。

半構造化インタビュー : 3名の慢性的な腎臓疾患の通院患者を対象にした。

インタビュー当日は、質的研究を専門とするインタビューアー(女性)が個室で1時間かけて対象者に聞き取りを行った。インタビューには、計量心理学者1名(男性)と、医師1名(男性)が同席した。インタビュー内容はICレコーダーで記録され、発語内容を逐語録として書き起こした。

逐語録は次の手順で分析された: 逐語録を繰り返し読み、ホープに関連すると思われる発言にコード番号を付与した。ホープに関連する発言を解釈し、対応するホープの構成要素を抽出した。同一患者内や、異なる患者の間で類似したホープの構成要素があった場合は、一つの構成要素となるように要素の名前をまとめ、複数の発言を一つの要素の中にまとめた。複数のホープの構成要素を整理して、発言内容の要約を行った。そして、カテゴリ化を行い名前を決定した。

研究4 尺度(質問紙票)の作成・パイロット調査

健康関連QOLの専門家の指導の下、インタビュー調査の結果も踏まえて、「慢性疾患に有用な希望尺度」の質問項目を作成した。その後、28名の慢性腎臓病の患者を対象としたパイロット調査を行った。

研究5 翻訳と逆翻訳の実施

日本語が流暢な2名のネイティブとの共同作業で、質問項目の翻訳・逆翻訳の作業を行った。

研究6 本調査

本調査では、尺度の信頼性・妥当性に関する検証が必要とされる。この目的を達成するために、慢性腎臓病患者(保存期腎不全、血液透析、腹膜透析)を対象と定めて、約 250 症例の収集を目標とし、5 施設での多施設共同研究を行った。「慢性疾患に有用な希望尺度」ならびに、既存の尺度を含めた質問紙票配布して、回収した。また、臨床データ(検査値、薬剤、並存疾患など)の収集も行った。その上で、以下の検討を行った。

1) 尺度の検証のために、項目反応モデル解析、既存の尺度を用いた基準関連妥当性の検討を行った。

2) 臨床疫学的な分析を行うために、臨床データと、希望尺度の関連性の分析を目標とした。

4. 研究成果

研究1 文献研究

日本語化されている尺度として、Beck のホープレスネス尺度(Beck AT et al. 1974)や拡張版ホープレスネス尺度(Abramson LY et al. 1985)がある。しかし、Beck のホープレスネス尺度は、精神疾患の患者を基に質問項目が作成され、それらの検証研究においても、測定の対象者の殆どはうつ病などの精神疾患患者に限定されていた。これらの日本語版の検証は、日本人大学生の測定のみに基づいて検証されていた(桜井, 1992; 高比良, 1998)。希望尺度としては、Erickson(1975), Miller(1988), Staats(1989), Herth(1991), Snyder(1996)等の尺度があった。なかでも、国内外の心理学・医学研究で数多く使用されているものは Herth と Snyder の希望尺度であった。しかし、これらをどれも一般人向けのものであり、慢性疾患の希望にかわる構成概念を含んでいなかった。

研究2 構成概念の検討・項目プールの作成

文献研究を踏まえ、心理学専門家・QOL 尺度専門家・内科専門医らで構成概念の検討を行った。ホープの構成概念として、「病気の見通し」、「サポート」、「役割」、「喜び・生きがい」の4つを想定した。また、このドメインに基づいて、分岐型を含めて 50 項目弱の項目プールを作成した。

研究3 質的研究(インタビュー調査)

発言から抽出されたホープの対象は、個人の置かれている状況(疾患の種類や重症度・喜びや楽しみ・家族構成・就労状況や友人な

ど)によって多岐にわたっており、ホープが複雑な構造をしていることが再認識された。ホープの対象が多様である一方で、疾患を踏まえた希望の様式化が見いだされた。すなわち、疾患による制限のためにホープの対象を見直して、目標の下方修正や新たな設定を行う様式や、すでに手にしている身近な対象を現状維持することをホープとする様式が観察された。この結果は、当初、我々が想定していたホープ マズローの欲求5段階説にみられる「自己実現欲求」のような、達成に時間がかかり工程の長いものとは大きく異なっていた。慢性疾患患者の切実な希望として、現実的な「現状の維持」に意味を見いだすのであった。

さらに、ホープが生じる前提として、慢性疾患を受容するプロセスなどの内的な基盤や、家族や友人とすでにつながっていることなどの外的な基盤が必要であると考えられた。これらの希望を生み出す基盤やプロセスについての発言、具体的な目標対象についての発言が、複数の種類の慢性疾患患者から得られた。したがって、これらの構造は成人の慢性疾患患者のホープに共通すると考えた。

研究4 尺度(質問紙票)の作成・パイロット調査

分岐型を含む 47 項目の項目プールについて回答を集めた。質問の意図がわかりにくいものや、日本語のわかりにくいものはないか、確認を行った。その上で、項目の表現の修正を適宜行った。ほとんどの項目は、修正の必要はなく、一部の項目のみ微修正を行った。

研究5 翻訳と逆翻訳の実施

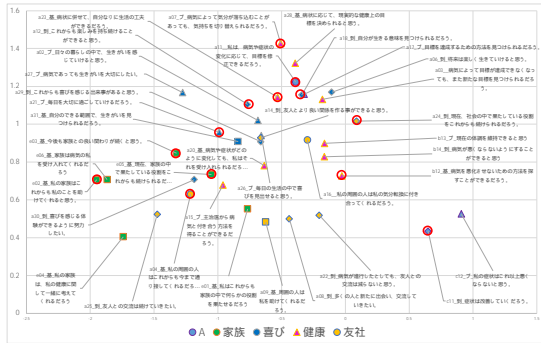
日本語で作成した項目プールを、英訳化した。文化的な違いで、英訳化した場合の項目の改変が必要であるかどうか検討した。大きな項目の変更の必要はないことを確認した。英訳化した項目に合わせて、元となる日本語の項目を適宜微修正した。

研究6 本調査

項目反応モデル解析

まず因子分析を行った。250 名のデータをもとに、44 項目について分析した時点では、スクリープロットで Eigen value が 1 因子とした場合のみ高値であり、2 因子以上では低値であった。これより、非常に 1 因子性が強いと判断した。

次に、1 因子性と判断して、次に項目反応理論に基づく分析を行った。項目反応理論に基づいて、項目の難易度と識別力の散布図を作成した。



また、古典的テスト理論の文脈での信頼性係数の推定値として、Cronbach's α を求めたところ 0.9 を超える信頼性を有していた。

既存尺度を用いた基準関連妥当性の検討

希望尺度得点を算出し、妥当性の検討を行った。希望得点と、既存尺度との間で Spearman 相関係数を求めた。Snyder 希望尺度との相関係数は、0.64 で中等度の相関関係であった。従って、一般人向けの希望に類似しているもの、部分的に異なるドメインを測定しているものと思われた。CES-D(うつ尺度)との相関関係は、希望得点が-0.492、Snyder 希望尺度が-0.418 で、いずれも弱相関であるが、本尺度の方が逆相関の関係が強かった。KDQOL(腎臓疾患特異的尺度)の腎臓に起因する症状との相関関係は、希望得点が-0.333、Snyder 希望尺度が-0.171 で、いずれも弱相関であるが、同様に本尺度の方が逆相関の関係が強かった。従って、一般人向けの希望尺度に比べて、本尺度の方がより慢性疾患を反映した希望を測定していることが示唆された。これらの本尺度と既存尺度の相関関係は、72 例の中間解析時論文の時点で得られた結果とほぼ同様であった(Snyder 希望尺度、CES-D、KDQOL の腎臓に起因する症状との Spearman 相関係数は、それぞれ 0.54、-0.50、-0.39)。

臨床データと希望尺度の関連性の分析

目標症例数を約 250 例から約 350 例へ変更した上で、平成 29 年 3 月時点において約 310 例まで症例集積した上で、調査を継続している。理由は医療情報の取得・データクリーニングに予想以上に時間がかかったためである。

まとめ

慢性疾患に有用な希望尺度は出来上がっているが、尺度の妥当性評価は、上記に記載した理由により遅れている。既存の尺度を用

いた妥当性評価は終了しているものの、臨床データの十分な収集を行った上で臨床データとの関係性を見るための妥当性評価を行い、準備中の本解析論文に結果を追加して投稿する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 脇田貴文, 栗田宜明, 加藤欽志, 富永直人, 紺野慎一, 福原俊一, 柴垣有吾, (2016). 慢性疾患患者における「希望」の概念の検討 - 患者へのインタビュー調査(質的研究)を通して - . 関西大学心理学研究, 7, 17-32. (査読無)
2. 栗田宜明, 脇田貴文, 福原俊一, 柴垣有吾, (2017). 2. 効果的な患者指導のエビデンス作成を目指した尺度開発と検証の実際. 日本透析医学会雑誌, 50, 180-1. (査読無)

〔学会発表〕(計 1 件)

1. 栗田宜明, 脇田貴文, 福原俊一, 柴垣有吾, (2016). サステナブルな患者指導を考える 効果的な患者指導のエビデンス作成を目指した尺度開発と検証の実際. 第 61 回日本透析医学会学術集会・総会, 2016 年 6 月 12 日, 大阪国際会議場

6. 研究組織

(1)研究代表者

柴垣 有吾 (SHIBAGAKI, YUGO)
 聖マリアンナ医科大学・医学部・教授
 研究者番号: 7 0 3 6 1 4 9 1

(2)研究分担者

福原 俊一 (FUKUHARA, SHUNICHI)
 京都大学・医学研究科・教授
 研究者番号: 3 0 2 3 8 5 0 5

脇田 貴文 (WAKITA, TAKAFUMI)
 関西大学・社会学部・准教授
 研究者番号: 6 0 4 5 6 8 6 1

紺野 慎一 (KONNO, SHINICHI)
 福島県立医科大学・医学部・教授
 研究者番号: 7 0 2 5 4 0 1 8

栗田 宜明 (KURITA, NORIAKI)
 福島県立医科大学・公私立大学の部局等・准教授
 研究者番号: 8 0 7 3 6 9 7 6